IEYASU AND YOKOSUKA CASTLE

【静岡県掛川市】

TAKE FREE

YOKOSUKA CASTLE

横須賀城家康読本

徳川家康による
高天神城奪還のための
兵站基地

TALES OF YOKOSUKA CASTLE

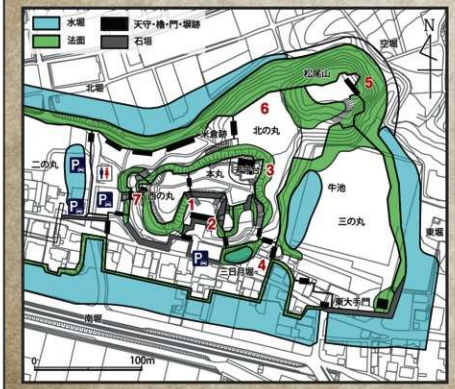
CULTURAL ASSETS IN KAKEGAWA

vol.03

AN EXCITING ADVENTURE JOURNEY

横須賀城 MAP

戦国時代の山城の景観を残す
美しい近世城郭



1 玉石による石垣
他の城郭には見られない稀有な石垣。

2 本丸虎口
攻守を主とする桝形虎口ではあるが、幾何学的な美しさもある。

3 天守台跡
一階北側を土塁上に架けた特異な天守形態だったと推定される。

4 三日月堀
戦国末期から江戸時代初めに造られた水堀。

5 松尾山の空堀
戦国時代に造られた巨大な空堀。

6 北の丸
松尾山と本丸を結ぶ曲輪。

7 西の丸から西方を望む
かつては広大な二の丸が続いていた。

WALK IN YOKOSUKA CASTLE

横須賀城の歩き方

横須賀城を見学する方の多くは、本丸虎口に立つと他の城郭には見られない玉石による優美な石垣と、技巧的な桝形虎口の大きさに驚くことでしょう(1・2)。
本丸虎口を通り抜けると、天守台(3)のある本丸、西の丸(7)に至り、そこから南方の眺望はかつて潟湖だった広大な田園風景が目に入ります。
本丸虎口に戻り、北奥へと進むと、北の丸(6)、城内最高所の松尾山(5)へと城域が展開、曲輪をつなぐ散策路は歩き易く整備され、老若男女問わず見応えのある歴史空間に誘ってくれます。
駐車場(2・7)とトイレ(7)も整備されています。
城内を見学するには普段着で十分ですが、階段や高低差もあり、特に雨天時には滑りやすい場所もあるため、スニーカーなどの歩きやすい靴が安全の上でもおすすめです。
横須賀城の景観を代表するのは、優美な玉石の石垣だけではありません。松尾山(5)北にある空堀は規模も大きく、戦国時代の山城としての側面を体感できるはずです。

【おすすめの服装】

■帽子　■長袖シャツ・上着　■インナーシャツ
■パンツ(ジーンズでも可)　■運動靴(スニーカーok)

ACCESS TO YOKOSUKA CASTLE

横須賀城へのアクセス

[所在地] 静岡県掛川市西大渕

- JR袋井駅から静鉄ジャストライン秋葉中遠線で「七軒町」下車、徒歩5分
- 東名掛川I.Cから県道38・249・409号で南進14km
- 新東名森掛川I.Cから県道40・403号で南進20km

徳川家康ゆかりの城「高天神城」と「掛川城」を紹介する読本

高天神城
WEB

掛川城
家康読本
WEB

発行者／掛川市観光交流課 TEL.0537-21-1121　https://www.city.kakegawa.shizuoka.jp　制作／株式会社マツヤマ・デザイン

TALES OF YOKOSUKA CASTLE

歴史と城 文化を歩く

［はじめに］

掛川市における戦国時代後半から近世にかけての城郭において、数多く残る城郭の中でも掛川市を代表する掛川城・高天神城・横須賀城は、掛川三城と呼ばれ親しまれています。掛川城は、戦国大名今川氏の遠江進出の足掛かりとして築城され、遠江支配の拠点としての役を担いました。その後、掛川城では遠江支配を目論む徳川家康と激突、掛川城の戦いにおいて家康が奪取すると、徳川氏の遠江支配が大きく進展しました。この戦いで、名門今川氏が滅亡しました。

高天神城では、徳川氏と武田氏の攻防が繰り返され、最終的に徳川氏の城郭となり徳川氏の遠江支配を盤石なものとします。敗れた武田氏は滅亡の道を辿ることになります。

掛川城と高天神城では、東海の戦国史はもちろんのこと、日本の戦国史を語る上で欠くことのできない事件（合戦）があった城郭として著名ですが、横須賀城では合戦はなく、二城に比べ控え目な印象は拭えません。ところが、徳川家康による高天神城奪還において、横須賀城は欠くことのできない重要な城郭だったのです。横須賀城築城の背景、高天神城奪還における横須賀城の役割を紹介していきます。

廃城となった高天神城とは異なり、湊を擁していた横須賀城は江戸時代に経済的発展を遂げていくことになります。近世初頭、地形変動という未曾有の危機に見舞われ、城郭と城下町は大打撃を受けますが、復興を遂げ明治維新まで存続しました。それゆえ、周辺城にはみられない独自の文化と産業を育むこととなりました。このような曲折を経ての横須賀城、その城郭構造と見どころを紹介するとともに、現在でも江戸時代の風情を残す城下町の様子を紹介していきます。

【A.北の丸から本丸を臨む】本丸は周囲の曲輪に比べ高く、その周囲は切岸を成していることがわかる。【B.松尾山背後の空堀】足元がすくむ程の高低差と、眼下には巨大な空堀が展開する。【C.本丸虎口の玉石積みの石垣】江戸時代には、小笠山麓から産出される古大井川の河原石が用いられた。【D.本丸天守台跡から南西を望む】18 世紀初め頃までは眼下に潟湖による海が広がっていた。【E.本丸虎口】玉石積みの石垣は、一見優美にも映るが、枡形虎口としての機能を十分にもっていた。

天正年間 1574年

横須賀城築城の背景 | chapter 1

高天神城奪還のための兵站基地

永禄三年（一五六〇）桶狭間の戦いにより今川義元が討死すると、駿河を本拠とし三河・遠江にまで勢力を伸長していた今川氏の威勢にも陰りが見え始めます。今川氏の衰退に呼応するように今川領の駿河・遠江には、武田氏と徳川氏の触手が伸びていくことになります。武田氏は今川領の駿河に加え、遠江の併呑を目論み度々侵攻を繰り返していました。一方、三河の徳川氏も遠江を固守せんがため、遠江の各地で激しい攻防が展開されていました。

中でも東遠江は両氏の境界地域にあたりました。両勢力の草刈り場※1と化していきます。とりわけ両氏の版図拡大の上で、何としても手に入れなければならない重要な駒、それが高天神城でした。

高天神城は、徳川方の東遠江における重要拠点として位置づけられていました。元亀三年（一五七二）には武田信玄の遠江侵攻により一旦は落城、その後、徳川方に復帰します。しかし、天正二年（一五七四）武田勝頼の猛攻によって奪取されてしまいました。

天正三年（一五七五）長篠の戦いで武田氏は織田・徳川連合軍に惨敗を喫すと、武田氏の遠江における勢力も後退していきます。二俣城（浜松市）・犬居城（森町）をはじめとする北遠中遠の武田方の城郭が徳川氏によって次々と攻め落とされ、重要な兵站※2拠点でもあった諏訪原城（島田市）までも落城してしまいます。そのような劣勢下にあっても高天神城だけは武田方が死守していましたが、徳川領に対峙する橋頭堡※3というよりもむしろ孤立した突出点のような状況になってしまったのです。

孤立した山城とは言え、高天神城をめぐる争奪の攻防を経て高天神城の持つ戦術的ポテンシャルの高さを認識していた家康は、その奪還として慎重かつ執拗な攻囲作戦を展開することになります。まずは奪還の拠点となる馬伏塚城（袋井市）を改修し、さらにその南東に岡崎の城山（袋井市）を築城しました。当時の馬伏塚城や岡崎の城山の周囲には低湿地や潟湖※4が広がっており、そのため小舟が往来する水上交通網が発達していたと考えられています。そこから南に進めば浅羽湊、さらに南東には横須賀湊がありました。家康は城郭と湊を結ぶ水上交通網による兵士ならびに物資の大量輸送ルートの構築に着手しました。

浅羽湊から岡崎の城山を経て拠点城郭である馬伏塚城までの兵站ルートを確保したものの、馬伏塚城から高天神城までは距離が開き過ぎていました。そこで家康は海浜から潟湖が展開する横須賀に目を付け、馬伏塚城主大須賀康高に新たな拠点城郭の築城を命じました。それが横須賀城です。高天神城の北の小笠山頂部の小笠山砦をはさみ馬伏塚城、その南東の岡崎の城山、さらに沿岸部を東進して横須賀城を築城することで、六砦（小笠山砦・能ケ坂砦・火ケ峰砦・獅子ケ鼻砦・中村砦・三井山砦）をはじめとし二十一カ所にも及ぶ城砦群による高天神城包囲網に加え、船舶輸送による強固な兵站ルートを構築しました。

くわえて、横須賀城は兵站基地としての役を担うとともに、天正七年（一五七九）には、横須賀城を本陣とし武田水軍の拠点である持舟城（静岡市）ならびにその出城の当目砦（焼津市）を攻撃、落城させています。兵站基地としての機能のみならず武田方の海上ルートの遮断と武田水軍の牽制と壊滅にも活躍しました。

西の丸から南を望む

現在は、広大な水田を中心に人家・工場などの建物が散見されるのどかな田園風景が目に入るが、かつては潟湖による穏やかな海が広がっていた。往時の景観を想像するのは困難であるが、広く展開する水田の中に、かつて入り組んだ内海を形成していた舌状の支丘陵が林として確認できる。

※1 草刈り場：村などにある共同で利用する茅などの草を取るための場所。転じて、多くの人が、こぞって利権や利益を確保しようとする場所や領域のこと。
※2 兵站：軍事上の人員・兵器・兵糧などの整備・補給等の物流全般を指す。
※3 橋頭堡：本来の意味は橋の対岸を守る砦のこと。敵地などの不利な地理的条件下での戦闘を有利に運ぶための前進拠点。

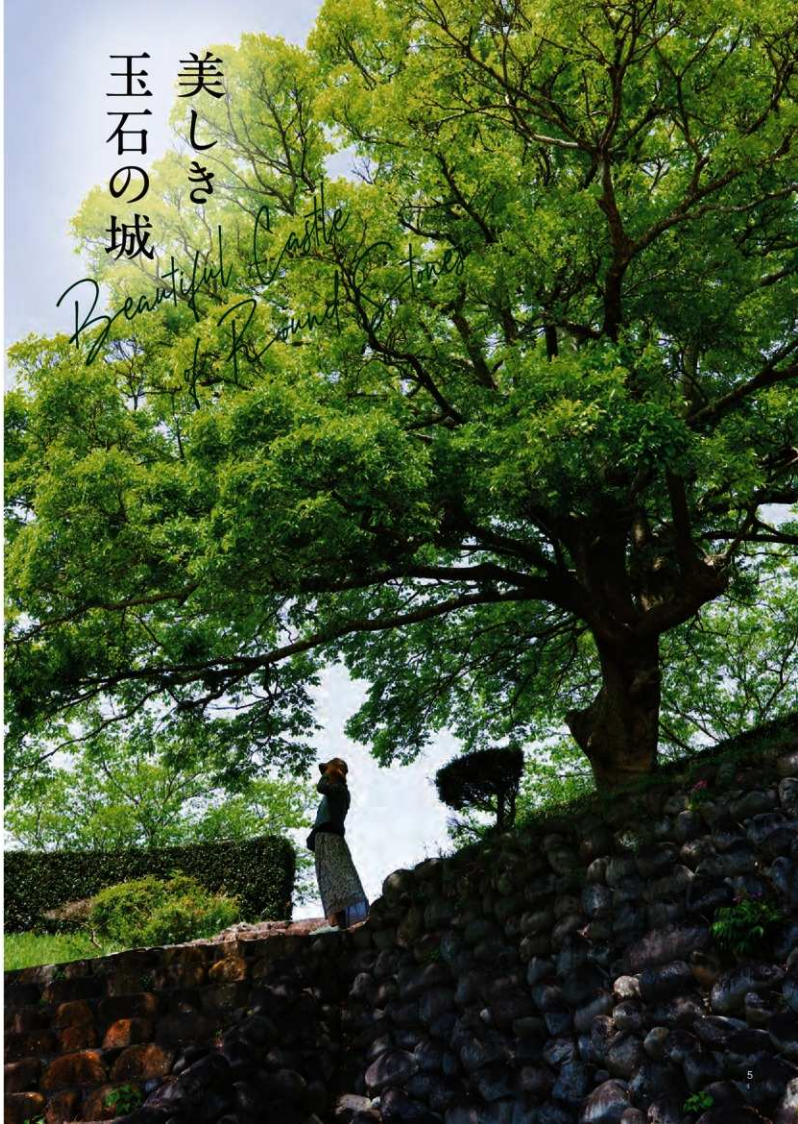
天正３年以降の遠江の勢力図

北遠・中遠の武田方の城郭は徳川方によりことごとく攻め落とされ、武田方の城郭は田中城・小山城・滝境城・相良城の駿河湾寄りの城郭であり、内陸部の城郭はほぼ徳川方となっていた。内陸部に唯一残った高天神城を武田方はかろうじて死守するものの、武田方にとっては劣勢にあったことがわかる。

潟湖に展開する兵站ルート

現況の地形図に往時の潟湖を重ね合わせたもの。戦国末期、袋井市の浅羽周辺には、遠州灘に向かって潟湖が展開していた。まず、潟湖の最奥にあった馬伏塚城を整備し、家康の本陣、兵士の駐屯地および兵糧・武器等の物資中継、後方支援基地とした。さらに馬伏塚城の南東約 1.5m の地に岡崎の城山を築城した。天正６年には、岡崎の城山から南東に約３ km の地点に横須賀城を築城、これにより潟湖での不安定な水運ではなく、船舶が寄港可能な湊と城郭による安定的な兵站ルートを確保することとなり、高天神城攻囲の穴蟻をはじめとする21 にも及ぶ砦郭への物資供給が可能となった。

※4 潟湖：湾や沿岸が砂州により外海から切り離された湖沼（浅い湖）。Lagoon（ラグーン）とも言う。



美しき玉石の城

Beautiful Castle of Round Stones

天正二年 1574・天正八年 1580年

横須賀城の沿革 | chapter 2

徳川家康自らが縄張りを指揮した最初の城郭

横須賀城の築城時期については諸説があり、天正六年（一五七八）から天正八年（一五八〇）頃、もしくは天正二年（一五七四）から天正四年（一五七六）頃と云われています。

横須賀城の選地は、最初から現在の地とされたわけではなく、石津の八幡山（石津八幡神社）や、後に横須賀城主大須賀氏ならびに本多氏の菩提寺撰要寺が建立される丘陵も候補地となりました。実際、一旦は八幡山や横須賀高校グランドの北にある水道貯水場周辺でも築城に取り掛かったことが記録されています。

家康は当初、三熊野神社北側の山稜に築城を考えました。山頂からの眺望が効き、とりわけ南方の遠州灘沿いの浜街道を眼下に収めることができ戦略上絶好の地にあることがわかります。しかし、三熊野神社は、大宝元年（七〇一）に文武天皇の勅願※5により熊野大権現を奉遷※6した由緒ある神社であり、家康はそこを見下ろす場所に築城することは畏れ多いと考え断念しました。最終的に三熊野神社北側の山稜から西方に位置する松尾山に築城することになりました。松尾山にも若一王子権現の社が鎮座※7していましたが、北方の小谷田に移されました。

このように築城の選地においては曲折を経ましたが、松尾山とその周辺への築城は家康自らが縄張り※8をした最初の城郭とされます。後の天下人にとって本格的に築城にかかわった最初の城郭として、浜松城と並び横須賀城も出世城とされる所以です。築城中から家康と息子信康はたびたび来城しており、高天神城奪還に対する並々ならぬ決意と執念をうかがえます。

天正九年（一五八一）、家康は小笠山砦、三井山砦、中村砦をはじめとする六砦を主に二十カ所にも及ぶ城砦による徹底した高天神城攻囲と、横須賀城、馬伏塚城などによる兵站ルートを駆使して念願の高天神城を奪還しました。

【横須賀城歴代城主】

代	城主名	期間	石高	代	城主名	期間	石高
1	大須賀康高 おおすかやすたか	1580〜1588	3万石	11	井上正利 いのうえまさとし	1628〜1645	4万2千石
2	大須賀忠政 おおすかただまさ	1588〜1590	3万石	12	本多利長 ほんだとしなが	1645〜1682	5万石
3	渡瀬詮繁 わたらせしげあき	1590〜1595	3万石	13	西尾忠成 にしおただなり	1682〜1713	2万5千石
4	有馬豊氏 ありまとようじ	1595〜1600	3万石	14	西尾忠尚 にしおただなお	1713〜1760	3万5千石
5	大須賀忠政 おおすかただまさ	1601〜1607	5万5千石	15	西尾忠需 にしおただみつ	1760〜1782	3万5千石
6	大須賀忠次 おおすかただつぐ	1607〜1615	5万5千石	16	西尾忠移 にしおただゆき	1782〜1801	3万5千石
7	徳川(松平)頼宣 とくがわ(まつだいら)よりのぶ	1615〜1619	幕府領	17	西尾忠善 にしおただよし	1801〜1829	3万5千石
8	松平重勝 まつだいらしげかつ	1619〜1620	2万6千石	18	西尾忠固 にしおただかた	1829〜1843	3万5千石
9	松平重忠 まつだいらしげただ	1621〜1622	2万6千石	19	西尾忠受 にしおたださか	1843〜1861	3万5千石
10	井上正就 いのうえまさなり	1622〜1628	5万2千石	20	西尾忠篤 にしおただあつ	1861〜1868	3万5千石

※5 勅願：天皇の祈願。 ※6 奉遷：神体などを他の場所に移すこと。 ※7 鎮座：神霊が一定の場所に静まり留まること。人や物がどっしりと場所を占めていること。
※8 縄張り：本丸・二の丸・三の丸等の曲輪をどう配置するか、防御のための堀や土塁をどう巡らせるか等、城の全体像の設計を示す。

遠江平定においては欠くことのできない高天神城でしたが、家康は奪還後間もなく高天神城を廃城にしてしまいます。難攻不落の城郭として戦術的には優れた城郭でしたが、三河、遠江、駿河の三国を手中にした家康にとっては、もはや高天神城に戦略上の意味はなくなってしまったのです。廃城とした高天神城とは逆に、横須賀城には城代を置き拡張整備し、新たな拠点城郭とします。

潟湖（※9）の入口を押さえる地勢的優位性と、兵站基地、とりわけ海路輸送の湊としての機能を重視したのです。掛川、浜松、相良に通じる陸上輸送と横須賀湊から江戸への海上輸送による交通の要衝として、地勢的かつ経済的に有利な横須賀城を遠江南東部支配の拠点としました。

天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉による天下統一後、家康が関東に移封（※10）されると横須賀城には秀吉配下の渡瀬繁詮が入城、繁詮は天守や石垣などの普請をもって織豊系城郭（※11）として整備。その後も城内、城下ともに拡張が続けられ近世城郭としての体裁を整えていきます。徳川幕府配下においては、松平、本多、西尾氏らの譜代大名の居城となり明治維新まで続きました。

横須賀城周辺に展開していた潟湖

現況の地形図に往時の潟湖を重ね合わせたもの。横須賀城は内海と呼ばれる潟湖に面し、城の直下まで舟の出入りが可能であった。城の北にある横須賀城主菩提寺の摂要寺も潟湖（入江池）に面していた。摂要寺の山号、景江山が示すように寺院の丘陵眺下には、潟湖の静波が打ち寄せる風光明媚な景観が展開していた。また、内海からさらに奥にあったことから荒波を避けられる避難湊として利用され、姥ヶ懐と呼ばれていた。

1 摂要寺 大須賀康高墓塔

2 摂要寺 大須賀忠政墓塔

YOKOSUKA COLUMN ―― ❶

横須賀城コラム❶

横須賀領内の大名墓

横須賀には歴代藩主の3つの菩提寺があり、藩主らの墓塔が安置されています。摂要寺には、初代城主の大須賀康高・忠政父子の墓塔と、本多康重・康紀・忠利の三代墓に加え藩主簾中※と子女の墓塔群があります。本源寺には井上正説と朔正勝の墓塔、圓眼寺には西尾忠成をはじめとする西尾家歴代藩主の墓塔があります。いずれも大型宝篋印塔と五輪塔で、とりわけ大須賀父子の墓塔は高さ4.5mを測る大型宝篋印塔で、樹木が繁茂する中にあっても圧倒的な存在感を放って鎮座しています。また、本多家三代の墓塔は高さ3m超える大型五輪塔で、前任地である岡崎藩から運ばれました。三代藩主墓塔の奥には、藩主簾中※と子女の大型宝篋印塔を中心に20基の墓塔が一列に並んでおり、荘厳さが演出されています。

近世大名の多くは、参勤交代制により江戸に菩提寺を設けるとともに、国元（領地）もしくは江戸のどちらかを墓所としました。徳川幕府黎明期の江戸時代初期には、墓所を国元に求める事例が多いのですが、17世紀後半以降その多くが江戸を墓地としており、国元に菩提所を設ける事例は極めて少なくなります。横須賀藩のように藩内に3ヵ所も菩提寺もしくは墓所を造営するのは、稀有な事例と言えます。

横須賀藩は3ヵ所もの大名墓ならびに菩提寺が存在する理由は明確にできませんが、江戸時代初期、墓所を国元に求める事例が多いのは、この頃の領地所有の認識として、領地は本領安堵※された大名の所有物との認識が強く、造墓によりその領地をゆり伝える明示的な証としたことによります。大須賀家の墓塔造営は徳川幕府黎明期にあたり、大須賀家が横須賀領を本領安堵されたものとの認識から、横須賀城を見下ろす場所に墓所と菩提寺を設け、未来永劫、城と城下を見守り続ける守護の精神の下、墓所・菩提寺が造営されたものと考えられます。

［摂要寺と本源寺は、一般公開されていません。］

※簾中（れんちゅう）：すだれで仕切られた内側にいる高貴な夫人。貴方。
※安堵（あんど）：権力者から土地所有権を確認されること。

※9 潟湖：P4の4参照　※10 移封：大名などを他の領地へ移すこと。
※11 織豊系城郭：織田信長・豊臣秀吉とその配下の家臣団・諸大名によって築城・改修された城郭。天守・石垣・礎石建物の導入など共通した特徴をもつ。

三熊野神社大祭

横須賀城下町の構造

chapter 3

横須賀城下町を歩く

横須賀城下は、城下町として整備される以前、三社市場と呼ばれる馬継ぎの宿場が置かれ、東西道と谷筋を北上し東海道に至る街道が交差する物資集散の町場が形成されていました。本格的に城下町の整備が始められたのは二代城主大須賀忠政の頃とされ、三社市場の町場を中心に城下の町割が行われました。その後、十二代城主本多利長の十七世紀後半頃までに完成したと考えられます。城下町としての完成期の様相を示す正保期から天和期にかけ（十七世紀後半）描かれた「遠州横須賀惣絵図」を参考にしながら、宝永地震前の横須賀城下をみてみましょう。

城下町の中でも町屋は城郭から東に向かって細長く伸び、それを囲むように北と南に侍町が配置されています。寺社は、北側の谷筋と❸三番町の南西に集中して配置されており、しっかりとした寺町が形成されていたとまでは言えませんが、寺社を同じ区域内にまとめる計画的配置があったことがうかがわれます。

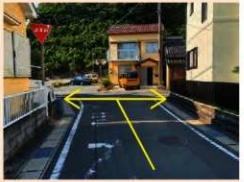
侍町の配置については、最上級家臣屋敷が城に隣接する❶石津町の東や❷坂下ノ谷の南に配置され、それに続く上級家臣屋敷も⑪石津・❹一番町・❷二番町の比較的城近くに配置されていました。それ以外の家臣屋敷は❺馬場町・❻杉町・❸三番町に、さらに外縁部に足軽町が配置されて

東田町の暗渠（運河跡）

17 世紀後半頃、下紙川は、東田町付近から流れを変え町中を流れる流路として整備された。現在は暗渠となっているが、かつては内海を経て横須賀湊へと通じる運河として機能していた。

軍全町に残る食い違い道

食い違い道とは、道を直交させず、わざとずらした道。敵が侵入してきた際、前方を遠くまで見通すことができず、また進行を遅らせる効果があった。



東新町と軍全町に残る丁字路

漢字の丁の字のように交差する道。直進して来た敵は、丁字路で建物にぶつかり左右に分散させられる。その分散により混乱させる効果があった。

いました。城主の居城を中心とし、その周囲に家臣団を身分と格式によって分け、計画的な配置が行われていたことがわかります。多くの城下町が城を中心とした同心円的配置となることから、横須賀城下のように地形上の制約から東西に長い城下においても、城主の居城を中心とした城下の整備の指向性が見て取れます。

町屋と侍町を区画し往来する街道には、交差する箇所をわざとずらした「食い違い」、直交させない「T字路」と呼ばれる部分がいくつか存在します。これは町中に敵が進攻した際、敵を攪乱させその進攻を遅らせる効果として設けられたものです。城下町が整備された江戸時代はじめ頃は戦国時代に比べ政情も安定しており、戦国時代のような軍事的防御と言うよりも城下町内の掌握と危機管理を高めるための施策でした。

先述のように、往事の横須賀城下町の特徴を語る上で潟湖を利用した横須賀湊の存在は看過できません。残念ながら現地形から湊があったことを想像することは難しいのですが、絵図と数少ない痕跡から湊町としての様相をうかがい知ることができます。絵図を見ると、町屋の⑰西田町や侍町の⑱坂下ノ谷（西新町・松尾町）などでは大小の流路が潟湖に向かって東西に走っていることがわかります。その流路の一つ沢上町の北谷筋から流れる下紙川は、十二代城主本多利長※12により十七世紀後半頃、⑲東田町付近で流れを変え町中を横貫する流路として整備されました。残念ながら現在では暗渠※13となっており湊に通じていた流路としての面影をうかがうことはできませんが、かつてこの流路は内海を経て横須賀湊へと通じ多くの小船が往来する運河として機能していました。東田町周辺では、運河を利用し年貢米や特産物の海上輸送を取り仕切っていた清水家、柴田家をはじめとする多くの廻船問屋※13が軒を連ね、賑わいを見せていました。横須賀の城下町ではこの湊から年貢米や特産物を江戸へ海上輸送する湊町として繁栄、その中心が西田町・東田町・⑲東新町周辺でした。

先述のように横須賀城下町にとって横須賀湊の役割は大きいものでしたが、周辺河川からの経年の土砂流入と、宝永四年（一七〇七）の宝永地震により湊機能は大きく衰退し、城下町にも大きな変化がもたらされました。大地震後の十八世紀初頭の城下絵図によれば、⑯小姓町（大谷町）や⑰南町（川原町）などの侍町、足軽町の敷地に大幅な縮小がみられます。この時期、石高※14も急激に減少しており、それが家臣数の減少につながり、絵図にみられるように侍屋敷地の縮小となって表れています。

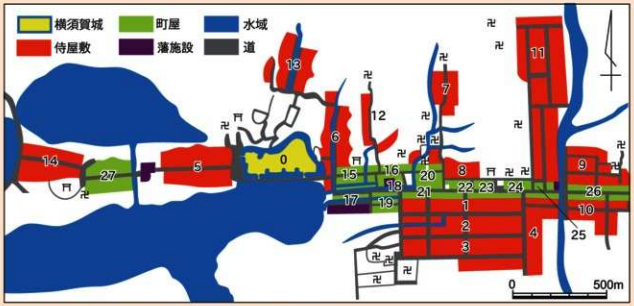
また、潟湖や入江が干上がる程の大きな地形変動だけでなく町屋においても多くの家屋が倒壊する等の被害を受けたものの、城下では同じ場所において被災からの復興を果たしています。横須賀同様、海浜付近に立地していた白須賀（湖西市）・新居・舞阪（浜松市）では地震後、同じ場所での復興を断念し移転せざるをえない程の被害を受けたのとは対照的です。横須賀の町屋は、池や干潟※15を埋め立てた脆弱な地盤上ではなく砂州※16や扇状地※17上の比較的安定した地盤上に立地していたためで、それが幸いし大地震後も移転することなく同じ場所で存続し、江戸時代の風情を今に伝えることになったのです。

城下にある古建築物の多くは古くても昭和初期頃に建てられたものですが、南北に長い短冊形の敷地は江戸時代の町屋を踏襲しており、往事の風情を感じさせる町並みとして認知されるようになりました。代表的な景観と建物を見てみましょう。

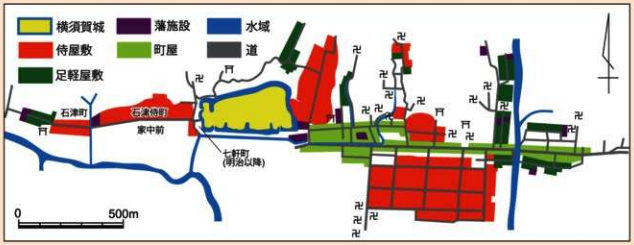
横須賀城下町の代名詞とも言える三熊野神社大祭（以下、三社祭礼）を主祭する三熊野神社は、文武天皇の皇后に由来する神社で、城下町のシンボル的存在となっています。三社祭礼は、地固め舞・田遊びの神事と、祢里（山車）

※12 暗渠：地下に埋設した水路。　※13 廻船問屋：江戸時代、荷主と船主の間にあって、積み荷の取り扱いもした業者。　※14 石高：江戸時代、土地の生産能力を米の量に換算して表したもの。
※15 干潟：海岸部に発達する砂や泥により形成された低湿地。　※16 砂州：海岸や湖岸のやや沖合に、細長く岸と並行に伸びた、砂嘴の堆積地形。
※17 扇状地：山地から流れる河川が運搬した砂礫が、谷口を頂点として扇状に堆積した地形。

No.	絵図の町名	現在の字町名	種類	No.	絵図の町名	現在の字町名	種類	No.	絵図の町名	現在の字町名	種類
0	よこすかじょう 横須賀城	まつおちょう 松尾町	城内	10	みなみちょう 南町	かわはらちょう 川原町	侍屋敷(足軽)	23	ひがしほんまち 東本町	ひがしほんまち 東本町	町屋
1	いちばんちょう 一番町	にばんちょう・さかばんちょう・ひがしばんちょう 西番町・中番町・東番町	侍屋敷(武士)	11	こしょうまち 小姓町	おおやちょう 大谷町	〃	24	あらやまち 新屋町	あらやまち 新屋町	〃
2	にばんちょう 二番町	にばんちょう・さかばんちょう・ひがしばんちょう 西番町・中番町・東番町	〃	12	おおのくらや 大倉之谷	ひがししんまち 東新町	〃	25	ちゅうぶのしまち 拾六軒町	ちゅうぶのしまち 十六軒町	〃
3	さんばんちょう 三番町	みなみばんちょう 南番町	〃	13	おやだ 小谷田	おやだ 小谷田	〃	26	かわらまち 河原町	かわらまち 川原町	〃
4	まくらちょう 枕町	ひがしばんちょう 東番町	〃	14	いしづ 石津	いしづ 石津	〃	27	いしづちょう 石津町	いしづ 石津	〃
5	いしづさむらいちょう 石津侍町	よこすか 横砂	〃	15	にししんまち 西新町	にししんまち 西新町	町屋	19	だいくまち 大工町	だいくまち 大工町	〃
6	さかしたのや 坂下ノ谷	にししんまち・まつおちょう 西新町・松尾町	〃	16	ひがししんまち 東新町	ひがししんまち 東新町	〃	20	ぐんぜんまち 軍全町	ぐんぜんまち 軍全町	〃
7	じゅもくがや 樹木ヶ谷	さわがみちょう 沢上町	〃	17	にしたまち 西田町	にしたまち 西田町	〃	21	にしほんまち 西本町	にしほんまち 西本町	〃
8	ばばちょう 馬場町	なかはんまち 中本町	〃	18	ひがしたまち 東田町	ひがしたまち 東田町	〃				
9	やまぐち 山岸	かわはらまち 川原町	侍屋敷(足軽)	22	なかはんまち 中本町	なかはんまち 中本町	〃				



正保期～天和期（1644～1684）の横須賀城下町「遠州横須賀惣絵図」により作成



18 世紀前半以降の横須賀城下町「横須賀城古図」により作成

YOKOSUKA COLUMN ―― ❷

横須賀城コラム❷

失われた潟湖

『遠州横須賀惣絵図（部分）』個人蔵
18世紀初頭まで城の南には、
潟湖が広がっていた。（円内が横須賀城）

横須賀城下に展開していた潟湖が平野へと変化してしまった原因については、宝永4年(1707)に発生した南海トラフを震源とする宝永地震により、横須賀南部の平野部が隆起、その後隆起により潟湖が干上がってしまったと想定されています。

近年の研究によれば地震性地殻変動による隆起が原因ではないとの説もあります。その説によれば、隆起はなかったとしたうえで、宝永地震以前の17世紀中頃から続いていた西大谷川・下蛇川・三沢川などの周辺河川からの大量の土砂流入による堆積と、天竜川・大井川河口への土砂流入と漂入により遠州灘には砂丘が広域に展開、その結果、横須賀湾口は徐々に塞がり、潟湖も徐々に埋まり内陸化、やがて田畑に変わっていったものと想定されているものです。

どちらにせよ、18世紀前半頃には潟湖は徐々に喪失、喫水※の減少により漁としての機能が失われたことは間違いありません。

元文4年(1739)の古文書によれば、宝永地震後に塞がった干潟が陸化したとの記述があることから、地震性地殻変動による隆起は否定できません。一方、漁業持のため17世紀後半頃から浚渫※が度々行われ、その後、新たな浚渫請も行われていることから、周辺河川からの土砂流入により潟周辺の潟湖は宝永地震前から干潟と化していたことがわかります。

地質調査では、地殻変動のような急激な環境変化の痕跡が認められる一方で、汽水を示す層も認められることから、徐々に環境変化していった場所もあったようです。

これらを勘案すると、潟湖が平地へと変貌した原因としては、周辺河川の経年の土砂流入による堆積と、宝永地震による隆起との複合的原因とも考えられます。今後の研究深化に期待しましょう。

※喫水（きっすい）：船の水面下に沈んでいる部分の深さ。　※浚渫（しゅんせつ）：河川や港湾などで水底の土砂等を掘り上げる工事。

巡行と狂言などの付祭に分けられ、付祭は十四代城主西尾忠尚の家臣が江戸天下祭の文化を伝えたものだとされます。毎年四月の第一金曜日から日曜日の三日間にかけて開催され、神輿の渡御※18とそれに従う勇壮かつ華麗な十三台の祢里の曳き廻しは圧巻の一言、町は祭り一色に染まります。

街道沿いで軒を連ねる古い商家群の中でも一際特徴的な建物が老舗割烹旅館の八百甚です。現在の建物は昭和初期のものですが、入母屋屋根の下に廻る庇、二階の高欄※19、意匠を凝らしたガラス戸など往事の建築の流行をよく伝えており、横須賀城下町のランドマークにもなっています。

江戸時代の横須賀城下の隆盛を物語るのが、廻船問屋を営み藩の御用商人※20でもあった清水家住宅です。町屋特有の南北に長い短冊形の敷地内に主屋・離れ・土蔵などの建造物がよく遺されています。先述のようにかつては下紙川を運河※21とした船着き場がありました。屋敷の南には江戸時代中期にさかのぼる回遊式庭園※22が整備され、今でも湧水による清らかな園池とそれを取り囲む樹木が織りなす四季折々の風情は、来訪者を和ませるとともに御用商人の邸宅としての風格を漂わせています。

横須賀城下においては、このような町並み景観の保全とともにその景観を生かしたまちづくりが進められています。下紙川を運河として利用していた本町橋から東の西大谷川に架かる新橋までの街道区間は、市の景観条例に基づいた景観形成重点地区に指定されています。「祢里の似合う街道の継承と創造」というテーマの下、江戸時代の風情を感じさせる町並みの保全とともに、建築物の屋根の形状や壁の位置、高さや色彩、屋外広告物などを、町並みにふさわしい景観として取り込もうとする地域住民主導のまちづくりが進められています。単なる保全にとどまらず、新たな継承の作法を育み、保全と営みの持続を同次元で取り組む積極的な試みとして期待されています。

清水邸庭園

廻船問屋を営み藩の御用商人でもあった豪商清水家の邸宅の庭園。江戸時代中期にさかのぼる回遊式庭園が整備され、茶室では掛川抹茶が楽しめる。

清水邸庭園の船着き場

母屋・離れ・土蔵などの建造物とともに、下紙川の運河を引き入れた船着き場が残る。船着き場では、現在でも清らかな湧水が絶えない。

老舗割烹旅館 八百甚

城下の古建造物の多くは昭和初期のものであるが、中でもひときわ目を引くのが八百甚。入母屋屋根、二重庇、高欄による重厚な造りは、城下の繁栄ぶりを物語る。

※18 渡御：天皇・皇后などがお出ましになること。神輿（みこし）が進むこと。　※19 高欄：建物の縁・基壇・階段などの端に設ける装飾と安全を兼ねた手すり。
※20 御用商人：江戸時代、幕府・諸藩に出入りを許され用品納入や金銭の調達をした特権商人。　※21 運河：船舶の航行のために人工的に開削された水路。
※22 回遊式庭園：日本庭園の形式のひとつで、園内を回遊して鑑賞する庭園。

特別付録　戦国資料

横須賀城の構造

潟湖を臨み湊を擁す天然の要害

横須賀城は、小笠丘陵から西南端に派生した尾根と、そこから西へ延びる砂州※23 を利用して築かれています。築城当初から江戸時代のはじめにかけては、城の西には「入江池」南は「内海」と呼ばれる潟湖があり、その潟湖※24 を天然の堀としていました。さらに、「内海」は井財天川を通じて遠州灘に至る運河※25 として機能させ、河口には湊が整備されていました。このように横須賀城は海辺の道と海運の拠点として遠江南部から遠州灘を押さえる要衝であり、高天神城奪還においても重要な兵站※26 基地として機能しました。

ところが、周辺河川からの経年の土砂流入と、宝永 4 年（1707）の宝永地震の隆起により潟湖が消滅、やがて陸地化、湊としての機能も失われました。海運による物流拠点としての機能を失った横須賀城と城下町は、経済面で大打撃を受けることになります。現在、海岸まで直線にしておよそ 2km が陸地となっており、往時の姿を想像するのは難しい状況にあります。

縄張※27 は砂州に沿うように東西に長く、その規模は東西 618m、南北は東の三の丸で 289m、西の二の丸で 184m を測ります。標高 26m の松尾山を最奥に、その前面に本丸、西に二の丸、東に三の丸が配されます。三つの曲輪※28 は、外堀と城内に配された池状の堀により分けられます。まず、16 世紀末に松尾山を中心に北の丸から本丸周辺に築かれ、17 世紀初頭、西の丸へと拡張され水堀も巡らされます。17 世紀中葉には東の三の丸が拡張され、さらに 17 世紀後半に西の二の丸へと拡張が重ねられていったと想定されます。

東西に長い砂州という地形に制約されるため、城域も自ずと本丸を中心に東西に拡張されていきました。後に拡張された二の丸と三の丸には、それぞれ西大手門、東大手門の二つの大手門が存在することから両頭の城との異名をもつことも横須賀城の特徴です。

本丸は天守台や西の丸などがあった主要郭と、御殿や倉庫があった北の丸に分かれます。特に本丸と西の丸は、近世城郭として整備されており、横須賀城を特徴付ける玉石積みの石垣が復元されています。玉石の石垣は警見すると奇異にも映るのですが、通常の角石を用いた乾然とした石垣とは異なり、玉石の曲線から成る石垣ラインは優美でさえあります。

本丸虎口は、本丸下段に位置し、左右を石垣に囲まれ、かつては大型の二階櫓門が存在しました。門を抜けると三方を石垣と切岸※29 に囲まれた桝形虎口※30 空間があります。三ヶ所の階段が設けられた内枡形となっており、攻城側が門に入った途端三方から頭上攻撃にさらされる、迎撃強固な虎口となっていることがわかります。

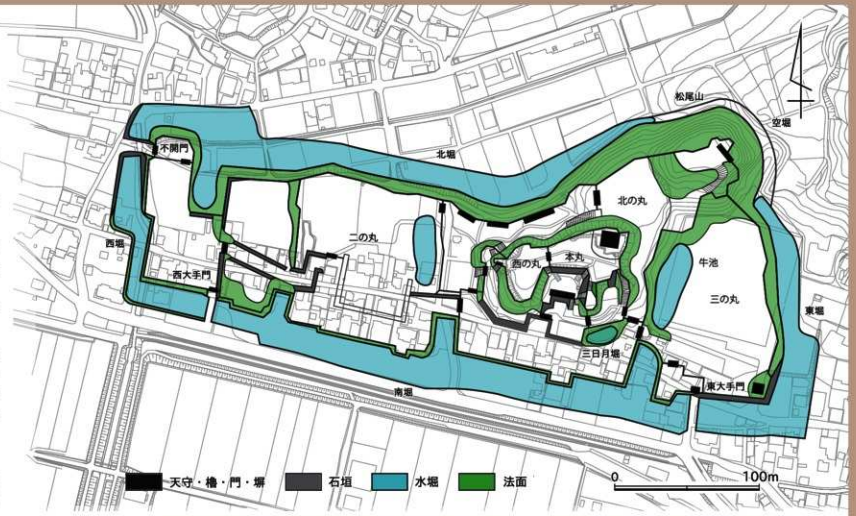
本丸の最奥には、かつて三層四階の天守が存在した天守台跡があります。発掘調査では礎石の根石※31 が確認され、その周囲には低い石垣がめぐっており、低い天守台と礎石配置を見ることができます。南東隅には入口と考えられるスロープがあり、天守台後方（北側）では防備のための土塁※32 が確認されていますが、一階北側を土塁上に架けた特異な天守形態であったと想定されています。

北の丸の北東に位置する松尾山は城域で最も標高が高く、築城当初は松尾山を中心に本丸と北の丸程度の比較的小高い丘陵のみでした。松尾山の発掘調査では江戸時代の遺構として、自然石を礎石に据え置いた多聞櫓※33 跡が確認され、櫓跡が表示されています。

松尾山の背後、城郭最東端には幅 30m、深さ 15m の巨大な空堀※34 が設けられており、山上から覗くその規模には圧倒されます。松尾山から続く尾根を巨大な空堀で分断することにより、東からの敵の侵入を遮断しました。近世城郭の中にあって山城としての景観を遺す数少ない遺構は、戦国時代の横須賀城の最大の見所であるとともに、この空堀こそが現在ににのこる徳川家康が構築した遺構、すなわち家康の痕跡なのです。

『遠州横須賀惣絵図（部分）』個人蔵

17 世紀後半頃の横須賀城とその周辺を描いた絵図。
城の西に「入江池」、南に「内海」と呼ばれる潟湖があった。



『遠州横須賀城図』国立国会図書館ウエブサイト (https://dl.ndl.go.jp/pid/1286314)

17 世紀前半頃の横須賀城を描いた絵図。曲輪配置がわかるとともに、城は水堀（一部空堀）に囲まれ、城の南は潟湖（内海）に面していたことがわかる。

※23 砂州：P9 の 16 を参照　※24 潟湖：P4 の 4 を参照　※25 運河：P11 の 21 を参照　※26 兵站：P3の 2 を参照　※27 縄張：P6 の 8 を参照　※28 曲輪：城の内外を土塁・石垣・堀等で区画した区域。　※29 切岸：斜面を削って人工的な急斜面の断崖とし、斜面下からの敵の侵入を防ぐために造られた防御施設。　※30 桝形虎口：虎口（城の出入口）の前面に方形の空間を設けることで、攻め手は直角に曲がらないと門へ入れず、守り手は攻め手に対し横側から攻撃できるように工夫した虎口形態。　※31 根石：礎石の水平と高さを調節するために礎石の下や周囲に入れる石。　※32 土塁：敵の侵入を防ぐために、主に盛土によって築かれた防衛施設。　※33 多門櫓：城壁の上に置かれた細長い櫓。　※34 空堀：水のない堀。